

## 関連性理論に基づく英語における分裂文の一考察

安藤裕介・川田 誠\*

### A Study of Cleft Sentences in English Based on Relevance Theory

Yusuke ANDO Makoto KAWATA

**【Abstract】** The analysis of Cleft Sentences has been, so far, mainly made based on the structure of information found in English discourse. However, there are inconsistencies in that approach that become problematic when it is used to explain the semantic or pragmatic structure of Cleft Sentences.

In this thesis, we propose that Cleft Sentences should be treated within the framework of Relevance Theory. This theory emphasizes the inferential processes of speakers and hearers in the production of Cleft Sentences. It is within this framework that we can solve some of the above-mentioned problems that occur with the information structure approach.

**【Key Words】** Relevance Theory, Cleft Sentences, Information, Discourse, Semantic Structure, Pragmatic Structure, Inferential Processes, Speakers and Hearers, Presupposition, Pseudo-Cleft Sentences

#### はじめに

本稿では、1990年代になり特に注目をあびている関連性理論に基づいて英語の分裂文の分析を行う。擬似分裂文についてはKato(1998)において詳細な研究がなされているので、本稿では、分裂文を中心的に取り扱う。その取り組みの中で英語の分裂文も関連性理論の中で適切に説明されることを明らかにしていく。

第1章では伝統的な立場である焦点・情報価値・前提からの分裂文の考察を試みる。第2章では先行研究を比較・考察する。第3章では、関連性理論による分裂文の分析を行う。

#### 第1章 焦点・情報価値・前提から見る分裂文

この章では、焦点位置による情報重要度について、情報構造の立場から分裂文・擬似分裂文を眺めてみることにする。この章では、安井(1978)、(1996)、福地(1985)、安藤(1987)、(1993)を参考にして述べていく。

なお本稿では新情報を全くもって相手が知らない情報(未知型新情報)と先行談話においてすでに伝達された情報を強調するためにあえて再提示する情報(再提示型新情報)に分けて述べていくことにする。

---

\* 久留米大学文学専攻科国際文化学専攻科生

## 1・1 分裂文の場合

- (1) a. It was John that broke the window.  
 b. It was yesterday that John broke the window.  
 c. It's upstairs that we have no heat.  
 d. It was afterwards that the news broke.  
 e. It was to John that she spoke.  
 f. It's because of the flood that they are leaving.  
 g. It was in spite of the cold that he went swimming.  
 h. It was buying a new hat that I enjoyed.

これらの例は安井 (1978) によるものであり、もとはEmonds (1970) によるものである。Emondsの枠組みによれば、これらの例のうち、焦点位置に名詞句がきているのは(1a), (1h)のみ(1b), (1c), (1d)は副詞句であるが、機能的には名詞句と同様に取り扱うことが可能である。)で、他の例はすべて前置詞句である。分裂文の焦点位置には、通常、名詞句が入ることができるわけであるが、条件があり、限定的表現に限られており、叙述的表現は入りにくいとされている。このことは(2)の文が容認できないことからわかる。

- (2) \*It is a baseball coach that Tom is.

上の文例からわかるように、名詞句であっても、叙述的表現(間接目的語や叙述補語)の場合は焦点位置に入りにくいが、例外的に次の場合は叙述的表現であっても、分裂文の焦点の位置に生起しうるのである。

- (3) Was it an interesting meeting that you went to last night?  
 (4) It wasn't interesting things that he told me.  
 (5) It was an interesting meeting and a very pleasant one that I went to last night.  
 (6) It is an important meeting that I'm going to and an interesting subject that they're discussing.

(安藤 1993: 28)

これらのことから、安藤(1987)では次のようにまとめられている。叙述的表現を持つ名詞表現も、限定的な名詞表現と同じように、分裂文の焦点位置に生起することは可能であり、広い意味では、限定・指示的表現を持つものであると見なしうるため、「分裂文の焦点の位置に生起できるのは、限定的性質を帯びた表現である」という基本原理を広義の意味で解釈して、適用範囲を広げる立場をとるほうが望ましいと考えて、論が展開されている。結論付けられた点として、なぜ、焦点の位置に限定的性質を帯びた表現のみが生起できるのかという点が指摘されている。要するに、分裂文は、通常の構文とは違う規則破

りの構文であり、明示的に、ある特定の要素のみに光をあてる効果を持ち、コミュニケーションを行う上で、一つのまとまりを与える構文で、一つに定められた焦点しか持つことができない周囲から区切りをつけられた構文であると主張されている。よって、基本的に限定・指示的性質を持っているということが理解できる。なお、安井(1978)においては、分裂文の焦点にくることが望まれているものに関しては、少なくとも名詞性の強いものが生じるのは極めて自然であると述べている。安藤(1987)ではまた、分裂文の焦点位置に通常、生起しないものであるとされる副詞句について議論が進められている。このことに関して、天野(1976)の知見を用いて論が展開されている。そこでは、*frequently*, *recently* といった-ly 副詞も焦点位置に生じる要素として認めるべきであるとして2つの根拠が主張されている。一つは、様態の副詞をはじめとする-ly 副詞でも Ivić (1964) でいうような省略不可能な要素を伴う場合は、焦点の位置に生じることができるということ、もう一つは、省略不可能な要素を伴う場合だけでなく、単独で焦点の位置に生じることができる-ly 副詞も存在するということが挙げられている。

安藤(1987, 1993)においては、天野(1976)の分裂文の焦点位置に生起する副詞句が他の要素よりも情報価値が高く、独自の情報単位として成立するとき、生起条件が満足されているという考え方が必ずしも十分でない主張されている。そこでは、天野(1976)のような情報重要度という考え方では次のような例が説明できないからであると述べられている。

- (7) \*It was carefully that John did it.  
 (8) It was with care that John did it.  
 (9) It was yesterday that John replied politely.  
 (10) \*It was usually that John replied politely.

安藤(1987, 1993)では、(7)と(8)の間、(9)と(10)の間ではそれぞれ、容認可能性の違いがあるにもかかわらず、焦点位置に生起する要素に関して、情報の重要度の差を見出しにくいようであると述べられている。

要するに、焦点位置に生起する要素の容認可能性は語彙に左右されることではなく、限定的性質を持つ要素が容認可能性に影響していると言うことができる述べられている。また、分裂文の焦点位置に生起しえない要素の中に、動詞句、形容詞句、一部の叙述補語、文があるとされている。

## 1・2 擬似分裂文の場合

擬似分裂文は、“主語+Be 動詞(連結詞)+補語”の語順形式をとる構文である。前提を示す主語節は Wh 語に導かれて先頭にくる構文である。分裂文と擬似分裂文の間には多くの共通点や平行性が見られる。この平行性に着目して擬似分裂文から分裂文を導き出すことを主張したのが、Akmaljian (1970)である。しかし、そこには相違点も存在する。

擬似分裂文と分裂文の相違は、分裂文の焦点の位置には生じないような動詞句、形容詞句が、擬似分裂文の焦点の位置に生じうるということである。

- (11) a. What you should do is blow up some buildings.  
 b. What John is is very brave.

(安井 1978 : 106)

Akmajianによると、分裂文を導く変形は擬似分裂文のうち、その焦点の位置に名詞句及び前置詞句をもつものに限定されているとされるが、安井(1978)では、この説明だけでは、擬似分裂文の一部は、分裂文としても表すことができるということだけがわかると述べている。Akmajian(1970)では、分裂文と擬似分裂文は同義的であって、前提を等しいものにして、同じ問いに答えるものであり、一般に相互交換可能な用いられ方をするものであるとされている。

テーマづけの観点から分析を行っている安井(1978)では、擬似分裂文の場合、その文のテーマとなっているものは、Be動詞(連結詞)の前の部分全体、すなわちWhat節の部分であると述べられている。

- (12) What Ken ate is a chocolate chip cookie.

この(12)の場合、What Ken ateの部分がその文のテーマとなっていることがわかる。テーマは、この場合、Kenという名の人物が食べたものと考えられる。このように、擬似分裂文において、テーマづけをなすのは、文頭の要素であると、安井(1978)は強調している。これまで述べたことを福地(1985)のアプローチを参考にしてまとめると以下のようになる。

- (13) 前提====焦点(擬似分裂文)  
 焦点====前提(分裂文)

福地(1985)では、擬似分裂文と分裂文の談話上の違いは、基本的に前提部分と焦点部分の生じる順序の違いによるものであると考えられている。要するに、擬似分裂文では前提が先にあり、焦点を後に置くのに対して、分裂文はその逆であるということである。また、言うまでもなく、前提部分は旧情報であり、焦点を含む断定部分は新情報を伝えると述べており、新情報として、前方照応の代名詞を扱うことができるとも述べている。しかし、この福地(1985)の枠組みで、前提部分に生起する新情報と見なしうる要素を適切に説明することは難しいように思われる。福地(1985)のこの考え方は不十分であり、「情報再提示」という考え方を導入することにより、福地(1985)の問題点に対する一つの解決策を考えることができるということを第3章で述べていく。なお、第2章では、過去に発表された分裂文・擬似分裂文の分析で得られた知見を比較・考察する。

## 第2章 先行研究の比較・考察

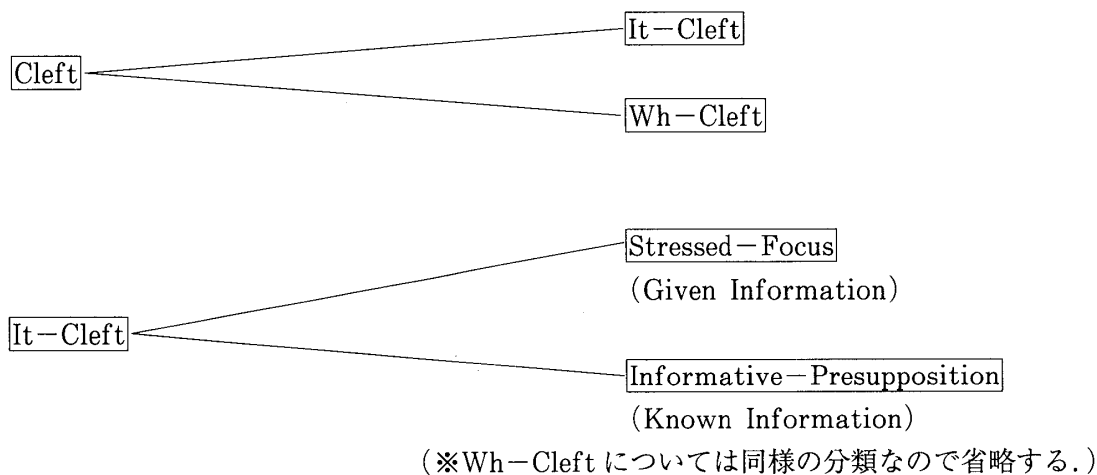
この章では、主に過去に発表された分裂文および擬似分裂文に関する研究で得られた知見を、比較・考察していく。英語の分裂文と話し手の情報の関わりについて、前提との関

連で論を展開している高橋（1992）も参考にしながら我々の見解も提示していく。

## 2・1 Prince (1978)

Princeは1978年に“A Comparison of Wh-Clefts and It-Clefts in Discourse.”という論文を発表した。この論文において、Princeは分裂文をWh-分裂文とIt-分裂文に分類し、さらにこの2つの分裂文をStressed-FocusとInformative-Presuppositionに分類している。

(14)



Wh-分裂文（擬似分裂文）の前提で表れている情報は所与情報（Given Information）を表し、Informative-Presupposition It-Cleftは既知情報を表し、両者の情報の機能が異なっているとされている。

まず、Princeの例を挙げてみることにする。

(15) Nikki Caine, 19, doesn't want to be a movie star. What she hopes to do is  
be on a horse-show circuit.

(Prince 1978)

第一文において、19歳のニッキ・ケインという名の女性がいる、映画のスターにはなりたくないということが、話し手にも聞き手にも理解される。すなわち、この文が与えられることによって話し手・聞き手の間でそのことはすでに了解されたことになるので、この文は前提を示す文であることがわかる。また、聞き手の頭の中で話し手は映画スターにはなりたくないのだから、他のことを目指したいと思っていることが予測できる。

よって、第二文の下線部は聞き手の意識の中に思い浮かべることができる前提を示す情報であることがわかる。

次に、もう一つ別の例文を挙げて考えてみることにする。

- (16) What I want to talk to you about is the theory of English semantics.

この例文には先行文脈がないが、談話環境が大学において、ある講義が始まったときであると設定して考えてみると、この擬似分裂文の前提は聞き手がすぐにわかる情報であるということがわかる。下線部が前提を表しており、教授が今日講義する内容をこれから話すのであろうと聞き手は頭の中で予測することが可能であると考えられる。このような情報を Prince (1978) では、所与情報と呼び、擬似分裂文における談話条件を次のように主張している。

- (17) Discourse Condition on WH-Clefts.

A WH-Cleft will not occur coherently in a discourse if the material inside the (subject) WH-clause does not represent material which the cooperative speaker can assume to be appropriately in the hearer's consciousness at the time of hearing utterance.

(Prince 1978)

所与情報に関しても以下のように定義している。

- (18) Given Information : information which the cooperative speaker may assume is appropriately in the hearer's consciousness.

(Prince 1978)

これまでは擬似分裂文の場合であったが、次に、分裂文の場合を挙げてみることにする。

- (19) It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend.

On September 25, 1926, in a somewhat shocking move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.

(Prince 1978)

- (20) It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar 1969, an incident from which many gays date the birth of the modern crusade for homosexual rights.

(Prince 1978)

これら2つの文の下線部は既知情報と Prince が定義するところの前提情報である。この下線部はまだ、聞き手には知られていないことであるが、世間一般においてよく知られた情報とみなして述べられている。たとえ、一般の人々によって知られていたとしても、聞き手が知らないことは伝達機能の観点から考察してみると新しい情報であると考えることができる。そこで Prince (1978) の中で、既知情報については次のように定義されて

いる。

- (21) Known Information : information which the speaker represents as being as factual and as already known to certain person (often not including the hearer).

(Prince 1978)

よって、Prince (1978) の知見をまとめると、擬似分裂文の前提の中に含まれる情報を所与情報に、分裂文の前提の中に含まれる情報を既知情報に分けてさまざまな視点から分析を行っていることがわかる。この両情報の定義に関する問題点は高橋 (1992) の中で指摘されている。

Prince は1979年にも同様のアプローチからの論文を発表している。そこでは、情報が旧情報と新情報に区別されている。ただし、新情報であっても、全くもって新しい新情報もあれば、比較的旧情報に近い新情報も存在することがある。これらが明確に定義されることなく、曖昧に用いられていることが、問題をより複雑にしているとも考えられる。

## 2・2 Gundel (1985)

Gundel は1985年に “Shared Knowledge and Topicality.” という論文を発表している。また、それに先んじて “Where do Cleft Sentences Come from ?” という論文を1977年に発表している。後者の論文では、分裂文は擬似分裂文に由来するものであると主張されている。ここでは Gundel (1977) の発展的議論が展開されている Gundel (1985) を見ていくことにする。

- (22) What I would like to talk about today is conversational implicature.

- (23) Wasn't it just yesterday that he said the troops would be out in a few days?

(高橋 1992 : 104)

※ただし、この2つの例は Gundel (1985) による。

下線部が前提を示す部分であり、(22) の例が擬似分裂文の例で、(23) の例が分裂文の例である。(22) の前提の部分は、「これから話そうとすること」であると解釈でき、それが前提情報になっている。(23) の前提部は、評言の一部として新情報を表していることがわかる。この論文においては、2・1で触れた Prince (1978) と同様に、分裂文と擬似分裂文に分けて分析を行っている。ここで次の談話の例を考えてみることにする。

- (24) A : Can I help you ?

B (a) : Yes, what I'm looking for is a printer.

B (b) : ? Yes, it's a printer that I'm looking for.

- (25) A : Are you looking for a printer ?  
 B (a) : Yes, what I'm looking for is a printer.  
 B (b) : Yes, it's a printer that I'm looking for.

(高橋 1992 : 104)

※ ただし、この2つの例は Gundel (1985) による。

(24) の会話の例で、下線部が前提を含む情報である。ここでは、文の最初にある B (a) の前提部に対して文末に焦点があり、これが新情報を担っている。また B (a) の前提部と同じ背景の前提をもつならば、B (b) は B (a) に比べて適切さに欠けているように考えられる。また、(25) の会話の例を考えてみると、B (a)・B (b) 共に、前提部で話し手が探しているものは、先の発話からもうお互いにわかっていることであるので B (a)・B (b) 共に前提部は背景前提を示していることから、分裂文・擬似分裂文共に容認可能となることがわかる。このことから、Gundel の分裂文・擬似分裂文の分析によって得られた知見は前節で述べた Prince の知見とほぼ同じであると考えられる。

### 2・3 Declerck (1984)

分裂文研究をさらに発展させた研究者の一人ともいうことができる Declerck は1981年に“Pseudo-Modifiers.”という論文を発表したことをきっかけに、1983年には“Predicational Clefts.”、1984年には“The Pragmatics of It-Clefts and Wh-Clefts.”という論文を発表し、また、1994年には“Review Article : The Taxonomy and Interpretation of Clefts and Pseudo-Clefts.”という批評論文を発表している。本稿ではその中で Declerck (1984) について考察を進める。

Declerck (1984) では、まず分裂文を分裂文と擬似分裂文に分け、さらにそれぞれを対比分裂文、照応焦点型分裂文、非連続分裂文、対比擬似分裂文、照応焦点型擬似分裂文、非連続擬似分裂文とに分けている。ここでは分裂文の例のみを取り扱う。

#### (26) 対比分裂文

- a. Nobody knows who killed the old man. The police seem to believe that it was a tramp who did it.  
 b. (1) Who made this mold ?  
 (2) Was it the teachers ?  
 (2') Was it the medicine man ?

(Declerck 1984)

これらについて、Declerck (1984) では、旧情報と新情報という用語を用いて、焦点の部分と前提の部分を説明している。(26 a), (26 b) では、前提部においては、先行文脈から理解できる旧情報があらわれ、焦点部においては、それらが対比的に用いられることによって新情報が表されている。



- (27) 焦点=====前提  
新情報=====旧情報

上の図からわかるように、焦点-前提構造の型をとる分裂文は情報構造の面からみると新情報-旧情報の構造をとる。この対比分裂文は焦点部で強勢をうけ、対比的な意味が強く、談話の冒頭部ではあらわれないとされている。次に照応焦点型分裂文を見ることにする。

(28) 照応焦点型分裂文

- a. It was also during these centuries that a vast internal migration (...) from the south northwards took place, a process no less momentous than the Amhara expansion southwards during the last part of the 19th century. (...)  
(Declerck 1984)
- b. It was he that who financed the railroad or the land-grabbing cattleman, or other evil forces.  
(Declerck 1984)

下線部が焦点を表すものであり、照応を示す代名詞や前置詞句をとっている。これらは、存在するあるいは存在する可能性のある先行文脈内において示されたものに照応するものであるから、これらは、旧情報を表すもので、強勢はなく、先行文脈とのつながりを促す役割を持っている。また、前提部は新情報であるが、あたかも旧情報であるかのように示され、強勢をうける。よって、情報構造の観点からまとめてみると次のようになる。

- |      |     |           |
|------|-----|-----------|
| (29) | 焦点  | 前提        |
|      |     |           |
|      | 旧情報 | 新情報 (旧情報) |

上の図からわかるように、Declerck (1984) では焦点部には旧情報としているが、これを旧情報と断言することは不適切であると考えられる。それは、旧情報の内容を含んだ新情報であるということも可能であるからである。ゆえに焦点部分全体を情報の新旧で明確に区別することは分裂文の説明に関してはあまり重要でないように思われる。なお、この照応焦点型分裂文は先行文脈との結びつきが強いので、談話の冒頭部では、通常用いられない。

最後に、非連続分裂文を見ておくことにする。

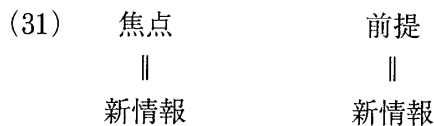
(30) 非連続分裂文

- a. It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. On September 25, 1926, in a somewhat shocking move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one. (=19)

- b. I think it was probably the same evening that I filled my tillylamp with water.
- c. It is through the writings of Basil Bernstein that many social scientists have become aware of the scientific potential of sociolinguistics.

(Declerck 1984)

(30 a), (30 b), (30 c) とともに、焦点部・前提部が新情報をあらわしており、いずれも強勢をうけ、焦点部の対比的意味はあまり強くなく、先行文脈との結びつきもあまり強くないので、談話の冒頭部に用いられている。情報構造の観点からまとめると次のようになる。



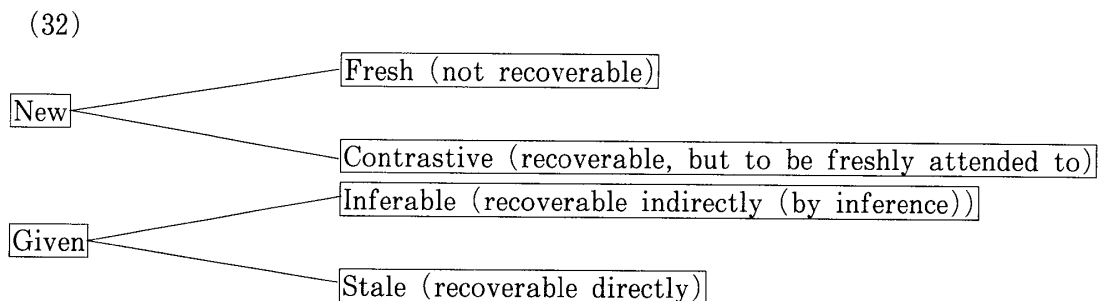
上の図からわかるように、焦点-前提の情報構造は新情報-新情報という型をとっている。この非連続分裂文は談話構造において特異な性格をもつ文である。次章では実際に分裂文を分析することとなるが、情報の新旧に基づいて分裂文についての考察を進めることは様々な問題点を含んでいるので、旧情報・新情報の概念からの考察を進めない。

最後に、Collins (1991) を見てみることにする。

#### 2・4 Collins (1991)

Collins (1991) では、分裂文の焦点部、前提部を情報の概念に基づき、さらに細かく分類し、分裂文の全体像を分析している。

また、分裂文の情報性を以下の図のように分析している。



(Collins 1991)

上の図からわかるように、Collins (1991) では新情報を Fresh と Contrastive に分けており、旧情報を Inferable と Stale に分けている。これらに分ける基準として、復元可能性が考えられている。なお、復元可能性の概念を用いて Geluykens は1988年に “Five

Types of Clefting in English Discourse.”という論文を発表しており，その中で，復元可能性について次のように定義している。

- (33) Recoverable information is information which is derivative from the discourse record, that is, from the context (either directly or via inferences): Irrecoverable information is information which is not thus derivable.

(高橋 1992 : 105)

もとは，(Geluykens 1988 : 31).

Geluykens は前提情報が先行文脈に要素として存在しているか，いないかという復元可能性の可否によって分裂文を区分している。

(32) からわかるように，この場合，組み合わせは16通り考えることができる。しかし，前提部－焦点部が旧情報－旧情報となる例は，情報伝達上考えられないのでこれは存在しない。

### 第3章 関連性理論による分裂文の分析

前章では，先行研究の比較・考察を行った。この章では，まず Kato (1998) を詳しく概観する。次に，Kato (1998) の知見を基に，分裂文に対して関連性理論を用いて分析を行い，実際に仮説を設定しての分析が可能であるということを示していく。

#### 3・1 Kato (1998) の概観

Kato (1998) では，談話の中に現われる擬似分裂文を関連性理論を用いて分析している。従来，この分野における研究は，Prince をはじめとして，プラグ学派の英語学者達を中心に旧情報－新情報という情報構造からの分析が主流であった。1980年代に文化人類学者の Sperber と言語学者の Wilson によって発表された関連性理論は，人間（ヒト）の認知に基づくコミュニケーション理論を明らかにしたものであり，言語学のみならず，哲学・文化人類学・記号学・心理学・認知科学・論理学・文体論・人工知能の分野に応用できる理論として，現在脚光をあびている。本稿で取り扱うこの関連性理論は，Grice (1975) の “Logic and Conversation.” の中で主張された「会話の原則」の範疇の一つである関連性のカテゴリーを発展させたものと見なすことができる。ここで，本論の議論を容易にするためにまず Grice (1975) の「会話の原則」をあげておくことにする。

(34)

#### Maxim of Quantity

1. Make your contribution as informative as is required.
2. Do not make your contribution as informative than is required.

#### Maxim of Quality

1. Do not say what you believe to be false.

2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

Maxim of Relation

1. Be relation.

Maxim of Manner

1. Avoid obscurity of expression.

2. Avoid ambiguity.

3. Be brief.

4. Be orderly.

(Sperber & Wilson 1986 : 33-34)

この「会話の原則」の各カテゴリーは並列的に列挙されているが、この原則の中でとりわけ重要なもので、最高部に位置づけられるのは、関係のカテゴリーであるとされている。次の節で関連性理論については述べるので、ここではまず Kato (1998) を概観する。

Kato (1998) は、英語の談話における擬似分裂文に関して、Prince・Declerck・Collins による情報構造分析の知見を挙げている。その後で、情報構造の観点（旧情報—新情報）からの分析には限界があると述べている。要するに、擬似分裂文の Wh-節の中身の内容は情報の新旧だけでは十分に説明できないという点を指摘して、関連性理論を用いて分析を行っているのである。ここでは、擬似分裂文を分析するにあたって推論・仮説を次のように設定している。

(35) Corollary of Relevance Theory

The element of indirectness in an utterance must be offset by some increase in contextual effects.

(Kato 1998 : 94)

(36) Hypothesis on Wh-Clefts

The cost required to process a Wh-Cleft must be offset by some increase in contextual effects.

(Kato 1998 : 94)

このような推論・仮説から、指示的文脈において、非分裂文より知覚処理を行うためにかなりの努力（労力）を必要とするにもかかわらず話し手はなぜ擬似分裂文を用いるのかという着眼点にもとづき考察が進められている。その理由として、話し手は擬似分裂文を用いると、直接的に表現されたものと比べて、話し手の意図を十分に表現することができると述べている。

続いて、擬似分裂文を関連性理論を用いて分析を行っている。Kato (1998) において、擬似分裂文の Wh-節の内容は先行談話と密接な関係をもっているが、統語的にアンバランスで調和がとれていないものとされている。また、擬似分裂文の Wh-節の中に表現されているものは、先行する言語的あるいは、非言語的文脈における、直接的あるいは間接的に有益な情報に関連すると考えている。この概念は Prince (1978) の「Wh-Cleft の先行詞」としての主張、福地 (1985 : 151) の「先行文脈に関連する Wh-節の意味」の

主張に由来するものと理解できる。これらの主張は、談話における擬似分裂文において知覚処理を行うものを制限するものについては、関連性理論の枠組みの中で形式化されることができるという考え方と相容れるものである。さらに Kato (1998) は、擬似分裂文における知覚処理を制限するものを推論を挙げて、考察を進めている。

(37) Processing Constraint on Wh-Clefts (I)

A Wh-Clause of a Wh-Cleft must be processed against immediately accessible contexts to access contextual information.

(38) Corollary (I) of (36) & (37)

A Wh-Clause of a Wh-Cleft is expected to guarantee contextual effects if it is processed against immediately accessible contexts.

(Kato 1998 : 95-96)

この(制約と)推論は擬似分裂文の焦点節にも当てはまり、あとに続く文脈において知覚処理を制限するものにも当てはまるため、推論は満たされることがわかる。

(39) Processing Constraint on Wh-Clefts (II)

A focus clause of a Wh-Cleft must be processed against immediately accessible contexts to identify the gap in the Wh-Clause.

(Kato 1998 : 96)

(40) Corollary (II) of (36) & (39)

A focus clause of a Wh-Cleft is expected to guarantee contextual effects if it is processed to identify the gap in the Wh-Clause.

(Kato 1998 : 96)

(41) Corollary (III) of (36), (37) & (39)

Wh-Clefts contribute to relevance by guiding the hearer towards the intended contextual effects, hence reducing the effort required.

(Kato 1998 : 96)

このような、(制約と)推論・仮説を基に分析を行っている。

(42) A : How am I going to get this spot out of the rug ?

B : What my mother always uses is vinegar.

(Kato 1998 : 96)

※ もとは、Collins (1991).

Bの発話はAの発話から以下に示す命題形式を引き継ぐものであると考えられ、(43b)のような想定を形成することができる。

(43) a. [A] asks [B] a [means] to get the [spot] out of the [rug].

- b. B is usually expected to answer the question by giving him a handy hint about spot removal.

(Kato 1998 : 97)

この(43 a)の想定において、Bは聞き手に対してしみを取り除くためにすぐに使える情報を与えることによって、通常質問に答えることが期待されている。さらに、じゅうたんについたしみを取り除くことに関してAと共有しうる他の知恵袋的情報や百科事典的知識が存在すると考えることができる。

- (44) a. Elders are a good source of handy hints.

- b. A mother is the sort of person one might regard as a source of knowledge and good practice in the event of problems whose solution requires a handy hint.

(Kato 1998 : 97)

(44 a)では「年配の人は(情報の)知恵袋である.」, (44 b)は「お母さんは人が何か解決するために必要な知識やすぐに役立つ情報の源である.」と解釈される。Bの発話(のWh-節)を聞くと、すぐに、Aは次のような理由に基づいて発話を理解するのである。

- (45) a. Repeated application of a particular method is likely to guarantee its usefulness.  
 b. If a mother repeatedly applies a particular method, then it is very useful and effective in spot removing.  
 c. Mother's regular method is very useful and effective in spot removal.  
 d. If a bottle of a cleanser or acid, such as vinegar is available, then it will effectively work in spot removal.  
 e. Only vinegar works effectively in spot removal among other things.

(Kato 1998 : 97)

上に示したものは、この後、分析の際に示す推論過程である。ここからわかるように、ここでの結論が産み出すWh-節の文脈効果(文脈上の含意)は、前に挙げた仮説(41)を満足するということができ、このことは擬似分裂文が排他的な含意や推意をもって使用されるものであり、話し手が擬似分裂文を用いると聞き手もあらかじめ排他的な含意や推意をもって発話を理解しようとするものであると述べている。次の節で述べるが、関連性理論の中の、最適の関連性(OR)によると、要するに聞き手は自分の推定をみだすために、知覚処理を行う際、価値がある情報が存在するはずだと想定し、その情報推定過程の中で擬似分裂文の焦点節の中身の内容を理解しようとしているということになる。

以上、Kato(1998)を概観した。ここで、気付くことは、擬似分裂文に対して関連性理論を用いると、情報構造の観点からの分析よりもやや詳しい分析が可能になるというこ

とである。だが、ここでは分裂文の分析を取り扱っていない。分裂文は、擬似分裂文より情報構造の点からみると有標さが増す構文であると考えられ、分裂文の場合は、関連性理論を用いて分析するほうが説明をうまく進めることができると考えられる。よって、本稿では、この理論の分裂文に対する適用について考察を進める。

### 3・2 関連性理論とは

関連性理論とは、人間（ヒト）の認知に基づくコミュニケーションを明らかにしたものである。関連性理論については一部、前で述べたが、ここでは次節で関係のある、最適の関連性（OR）と関連性の原理（PR）を挙げておくことにする。

#### (46) Optimal Relevance (OR)

An utterance is optimally relevant if and only if it achieves an adequate range of contextual effects for the minimum justifiable processing efforts.

(Kato 1998 : 94)

※ 元は Sperber & Wilson (1986).

#### (47) Principles of Relevance (PR)

(1) Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.

(Kato 1998 : 94)

(2) Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(Kato 1998 : 94)

※ 元は Sperber & Wilson (1986).

この原理からわかるように、最適の関連性というものは、もし、十分な文脈効果を持つものであれば、その発話是最適の関連性があるということが言える。また、関連性の原理は、聞き手が最適の関連性があるということを期待し、発話を継続させ、情報を解釈するようになるということを述べている。

次節では、これらの原理・仮説を用いて分裂文の分析を行っていくことにする。

### 3・3 仮説の設定

本節では、関連性理論による分裂文の分析を行うにあたって仮説を設定する。これから述べる仮説は Kato (1998) を参考にして設定したものである。

まず、分裂文を知覚処理するために求められる処理労力のコストは、文脈効果の結果、生じた効果によって埋め合わされなければならない。もし、話し手が分裂文を用いたならば、指示的文脈において非分裂文よりもかなり加重な処理労力が聞き手に求められるのであろうか。必ずしもそうであるとは言えない。通常の表現において話題を展開させることが話し手の考えを完璧に表現することができないと考えられるから分裂文を使っているだ

けであり、処理労力のコストとは直接、関係しないと思われる。また、文脈効果は、話し手が伝えようとすることを強調することであり、分裂文でない文によって表現される情報を埋め合わせることが望まれているのが分裂文である。また、分裂文において知覚処理を制限するものという点から、分裂文の that 節（前提部）は、文脈上の情報の理解を助けるために、聞き手が理解しやすいように知覚処理されるべきであることが望まれている。以上のことから次の3つの仮説を設定する。

#### 〈仮説Ⅰ〉

すぐ前の接近可能な文脈に対して、知覚処理がなされるならば分裂文の that 節は文脈効果を保証することが期待されている。これは、分裂文の焦点節にもあてはまり、後に続く文脈において知覚処理を制限するものにもあてはまる。

#### 〈仮説Ⅱ〉

分裂文の焦点節は that 節とのギャップを認定するために知覚処理されるならば、文脈効果を保証することが期待されている。

#### 〈仮説Ⅲ〉

分裂文は聞き手を意図された文脈効果の中に導くことによって、関連性に寄与している。結果として必要とされる労力が減る。

すなわち、関連性理論は直接、発話の容認可能性を判断するだけでなく、文脈上の推意の効果話し手・聞き手の相方に割り当てることを示す理論である。Kato (1998) でも述べているように、発話行為を行うことは、発話者とその発話にとって最適の関連性があるとみなしているということを伝達することであり、それが関連性の原理の根幹にある。発話において、最小限の認知・知覚処理労力で、最大の文脈効果をもてばもつほど、この発話は最適の関連性をもっていくようになる。この点を中心に次節で分裂文を分析していく。分析コーパスとしては、英字新聞・文部省検定教科書・高校生対象英語問題集・大学入試問題集・学術論文・大学教養課程の英語教科書の文章を利用する。

### 3・4 分裂文の分析

前の節で述べた点を中心にこれから分析コーパスを用いて考察を行っていく。はじめに、この章で概観した Kato (1998) の中で用いられた文を一部変えて分析を行ってみる。

(48) A : How am I going to get this spot out of the rug ?

B : It is a vinegar that my mother always uses.

この例文は Collins (1991) を参考にしており、発話者Bの発話文は原文では擬似分裂文になっているが、ここでは分裂文に書き換えた。発話者Aはじゅうたんについてのしみをどのように取り除けばよいのか、Bに情報を与えてもらうことを望んでいることがわかる。その発話に対して、Bは「私の母が用いているのは酢である。」ということ伝達している。では、この会話を一部取り出して解釈してみることにする。



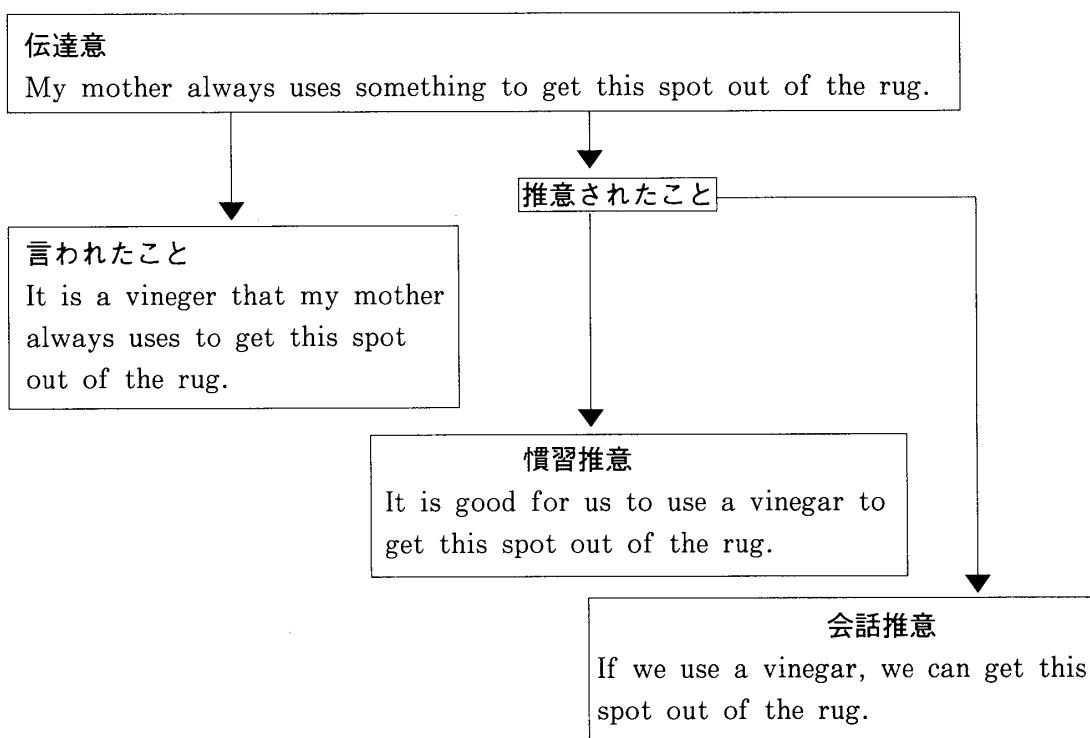
(49) [A] asks [B] a [means] to get this [spot] out of the [rug].

この文は、この発話における命題であり、発話者AはBにじゅうたんのしみの取り方を尋ねている。括弧で施した部分は関連性を相手が認知する語彙カテゴリーである。発話者はAとBの二人で、「しみ」と「じゅうたん」から、Aが所有しているじゅうたんに、食べこぼしの後にしみが付き、それを取り除く「方法」を知りたがっていることが理解できる。

発話者BのIt is a vinegar that my mother always uses. より、私の母親が用いているのは酢であるのだと解釈できる。Prince (1978)・Declerck (1984) では、a vinegar が新情報で、that 節が旧情報と処理されることになる。だが、すでに述べたようにこれらの先行研究においては、旧情報の定義はもとより、新情報の定義が明確でない。ここで考えるべきことは、特に新情報に関することである。つまり、先行談話において、すでに述べられている情報を再提示することによって新情報として扱うことができるのではないかと考えられるのである。今後、関連性理論を用いて分析する際、注目すべき重要課題となってくるであろう。本稿では、新情報と述べる際には、全くもって新しい新情報 (Brand-New) と、先行談話の情報を再提示することによって、新情報の働きをする再提示型新情報と区別して考えていく。

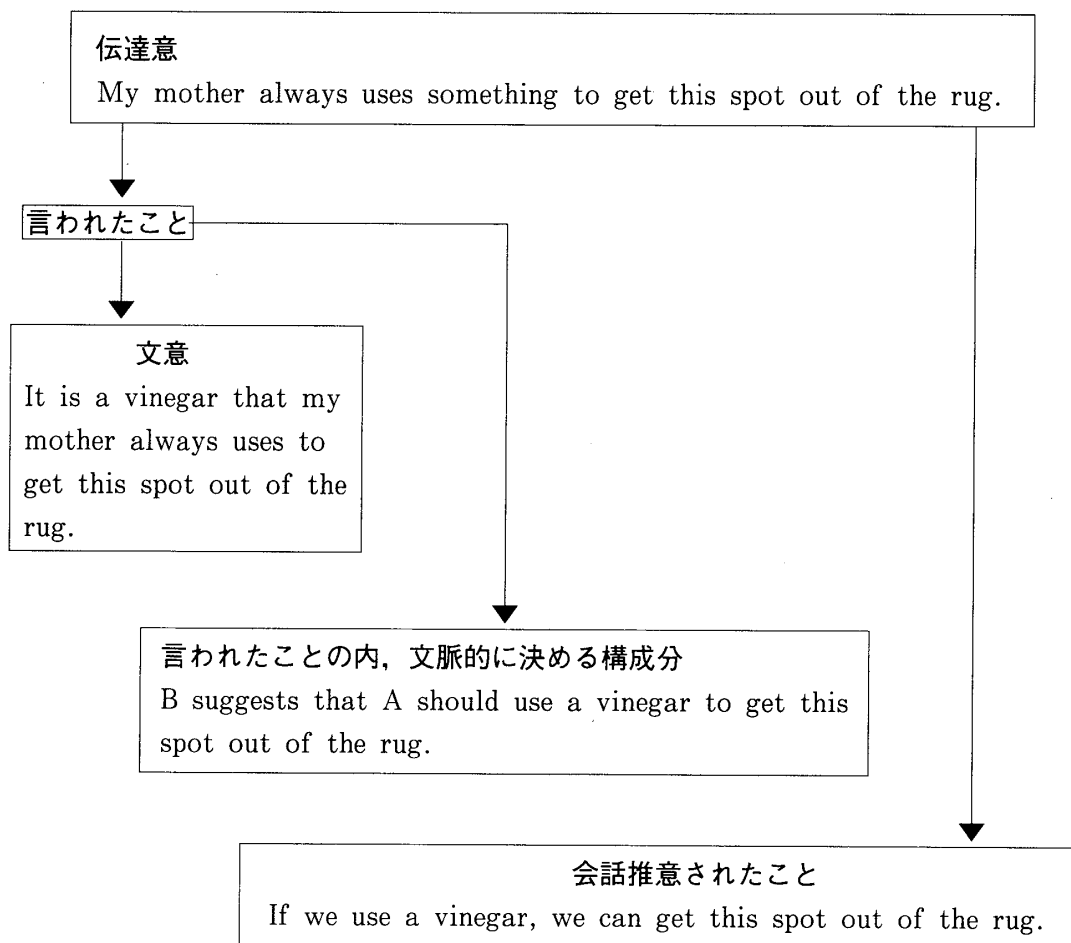
ここで、前に用いた例文を、Blakemore (1992) に基づき、グライス派理論の分類における分析と関連性理論での伝達情報分類における分析を引用して、以下に図示して考えてみることにする。

(50) グライス派理論の分類における分析



(Blakemore 1992, (武内・山崎 1994 : 303))

## (51) 関連性理論での伝達情報分類における分析



(Blakemore 1992, (武内・山崎 1994 : 303))

※ 原典は, Recanati (1989).

これら二通りの分析は、実際のところ、基本的な考え方がほとんど同じであるように思われる。このような点からも関連性理論は、グライスの「関係のカテゴリー」に基づいているということがわかる。

- (52) “Mr. Xanana Gusmão, unlike those poisoners and detainees whom we are now releasing, did not only engage in flag-waving or demonstrations or other actions usually connected with political actions,” Mr. Alatas said. “He also—during the time that he was leading the forces in East Timor whom we have called security-disturbance perpetrators—he has killed, he has burned villages, he has killed innocent villagers, he has raided the properties of villagers.” It is for these criminal acts that he has been brought before the courts and convicted,” he said.

この文章は1998年8月6日のニューヨーク・タイムズ紙のある記事を抜粋したものである。談話において、発話行為を行うものは、この記事を書いた記者と読み手である私たちである。記事の内容は、インドネシアの東チモールにおける自治権に関するものである。ここで、特に、次の文に着目して考えていきたいと思う。

- (53) “It is for these criminal acts that he has been brought before the courts and convicted,” he said.

この文は、「法廷の前に彼が連れて行かれ、有罪と判決されたのは、これらの残虐な行為のためである」と彼は言った、と解釈される。ここで、相手に強調して言いたい部分、すなわち、焦点はfor these criminal actsの部分である。Prince (1978) などの知見を用いて分析するならば、for these criminal actsは新情報ということになる。前で述べたように、分裂文の焦点位置に入ることができるかとされているのは、典型的には名詞句と前置詞句であり、この部分はその中の前置詞句である。この焦点部のtheseは前方照応を示す代名詞で、先行文脈のhe has killed, he has burned villages, he has killed innocent villagers, he has raided the properties of villagers.を示す。ゆえに、この分裂文においては、再提示型新情報が焦点部に含まれたものであると考えることができる。

- (54) In 1895 in France the two brothers Auguste and Louis Lumiere made a machine that they called the *cinematographe*. It was from this word that we now have the “cinema”.

この談話における分裂文は、It was from this word that we now have the “cinema”.である。

- (55) Modern inventions almost always turn out to have side-effects, which the inventors and the buyers don't usually notice at first. It is in these side-effects that their disadvantages come to light.

この文における分裂文は、It is in these side-effects that their disadvantages come to light.の部分である。

(54), (55) の文も (53) と同じ再提示型新情報をとる分裂文である。焦点節が、前置詞+前方照応を示す代名詞+名詞の統語構造をとっている。前節で設定した仮説に基づいて分析を行うと、仮説Iにおいて、「すぐ前の接近可能な文脈に対して、知覚処理がなされるならば、分裂文のthat節は文脈効果を保証することが期待されている。」と述べたが、これらの分裂文のthat節の内容は、先行文脈に対して、文脈効果を保証すると言うことができる。それは、that節の内容は焦点節の前方照応を示す代名詞を含む部分と対応する情報が入ることになるからである。また、(53) の例は次の様に解釈することができる。

- (56) A [writer] told us the [reason] why the [sinner] had been brought before the [courts] and [convicted].

括弧でくくった部分は、関連性を受信者である私たち読者が認知する語彙カテゴリーである。よって、記者が私たちに法廷の前に犯罪者が連れて行かれ有罪がくだされた理由を伝えたいということが命題となっていることがわかる。

- (57) In 1895 in [France] the two [brothers] Auguste and Louis Lumiere made a [machine] that they called the [cinematograph].

これは、(54) の第2文(分裂文)の先行文脈の部分であり、括弧でくくった部分は、関連性を、相手である私たち読者が認知する語彙カテゴリーである。

- (58) Modern [inventions] almost always [turn out] to have [side-effects], which the [inventors] and the [buyers] don't usually notice at first.

(57) 同様に、(58) の括弧でほどこした部分は、関連性を、読み手が認知する語彙カテゴリーである。これらの(56)~(58)の例から仮説Ⅱとして挙げた「分裂文の焦点節はthat節とのギャップを認定するために知覚処理されるならば、文脈効果を保証することが期待されている。」ということも満足し、仮説Ⅲの「分裂文は聞き手を意図された文脈効果の中に導くことによって、関連性に寄与している。結果として必要とされる労力が減る。」ことも立証することができる。

次に、今挙げた3つの分裂文の推論過程をこれから示すことにする。推論とは、相手が言った発話を理解するために聞き手が頭の中で考えて、発話内容を理解するシステムであるといえる。まず、私たちの母語である、日本語の談話の例を取り上げてそのシステムを説明する。

- (59) A: 「最近、寒い日が続きますね。」  
 B: 「そうですね。」  
 A: 「ちよっと、ここも冷えているように感じませんか。」

この談話が冬のある日すきま風が入り込んでいる部屋などで行われていることは、その内容から理解できる。ここで、Aの「ちよっと、ここも冷えているように感じませんか。」という発話に注目してみる。最初の発話を聞き、BはAが寒いと感じていることを認知する。また、この部屋は冷えているのだと発話したAが、近くに開いている窓がある場合にそれをBに閉めてほしいという意図をもっているのだとBは推測すると言うことができる。その推論をもとにし、Bが窓を閉めるという行動に移るであろうと考えることは可能である。(もし開いている窓がない場合にはエアコンのスイッチを入れて、部屋を暖めるようにすることも考えられる。)日本語の発話のみならず、他の外国語の発話においても、発話を理解するために、人間(ヒト)は、推論という認知行為を用いて、会話を円

滑に進めていく。このことをふまえて、推論過程を示すことにする。

(53) の分裂文の場合を考えてみると、これは、新聞の記事であるため、談話構成に関与するのは記事を書いた記者と読み手である一般大衆、すなわち私たちである。

(60) (53) の推論過程

推論過程①：インドネシアの東チモールで自治権に関する対立が起きている。

↓

推論過程②：その問題において対立する人がいる。

↓

推論過程③：Gusmão は人を殺し、村を焼き、何の罪もない村人たちを殺し、村人たちの特権を奪った。おそらく、有罪で、死刑になるだろう。

↓

文意：It is for these criminal acts that he has been brought before the courts and convicted,  
(法廷の前に連れて行かれ、有罪であると判決されたのはまさにその残虐な行為のためである。)

この新聞記事の読み手である私たち一般大衆はインドネシアの東チモールで自治権に関する対立が起きているということを、記事を読むことによって認知し、理解していく。その中で、デモ行為を行う者がいて、その中心人物の一人の Gusmão という人物は人を殺し、村を焼いて、村人たちの特権を奪ったと書いてあるので、私たちはこの人物は罪が重く、法によって処刑され、死刑にされるだろうという推論をはたらかせながら、談話における発話を理解していくのである。

次に、(54)、(55) の談話における分裂文の推論過程を示すことにする。

(54) と (55) の談話は、高校生を対象にした英文解釈問題集にある問題を抜粋したものである。

## (61) (54) の推論過程

推論過程①：1895年のフランスで起きた出来事である。



推論過程②：二人の兄弟である Auguste と Louis が何かを作った。



推論過程③：cinematograph という名の機械を作った。これが cinema と関係があるのだろうか。



文意：It was from this word that we now have the “cinema”.  
 (私たちが今、用いている cinema という言葉はまさにこの言葉 cinematograph からきているのであった。)

## (62) (55) の推論過程

推論過程①：現代の発明品は、ほとんどいつも副作用をもっている。



推論過程②：発明者や買い手たちは、たいてい、まず副作用には気付かない。だが、どこか副作用があるのだろう。



文意：It is in these side-effects that their disadvantages come to light.  
 (不利な点が明るみに出たのは、まさにその副作用の中であった。)

いままで挙げた推論過程により、仮説としてあげた、仮説Ⅰ・仮説Ⅱ・仮説Ⅲは、立証することができたが、まだ、説明に不十分な点が存在することがわかる。不十分な点とは、分裂文の焦点節の中で、果たしてどの語彙が新情報であるのかを示していないことである。また、今まで分析に用いた談話には再提示型新情報が焦点節に入った分裂文を取り上げてきたが、聞き手にとって全く新しい情報 (Brand-New) が焦点節に入った分裂文につい

ては、全く触れていない。これからは、上に挙げたテーマに的を絞って論を展開していくことにする。

次に示す例は、1998年8月6日のニューヨーク・タイムズ紙の記事の一部分である。

- (63) The full Board of Elections has yet to hear Ms. Kelly's case, and she has plenty of money for legal appeals. But right now, dozens of candidates for minor offices are being disqualified because they cannot afford to pay the legal fees required to mount a court fight. Witnesses who circulated petitions are being dragged into court and terrified out of ever volunteering to work for a candidate again. It is on that level that New York's democratic process is turned into a mockery.

この記事は、ニューヨーク州の選挙法に関する内容である。記事の見出しが“New York's Twisted Democracy”となっているため、この見出しにより、ニューヨーク州は民主主義がねじまがっているほど、緊迫しているのだと読者は想定し、推論を組み立て、内容を理解していき、分裂文によって、事実をより明確なものとして把握していくのである。

- (64) It is on that level that New York's democratic process is turned into a mockery.

ここで、特に、焦点節の内部にスポットをあてて分析してみることにする。

on that levelは前置詞+前方照応を示す指示代名詞+名詞という構造をとっている。thatは前方照応を示す指示代名詞で先行文脈の“dozens of candidates for minor offices are being disqualified because they cannot afford to pay the legal fees required to mount a court fight. Witnesses who circulated petitions are being dragged into court and terrified out of ever volunteering to work for a candidate again.”を指示する。この場合、新情報としての情報重要度を増す働きをする語彙が存在することが予測できる。(63)でこれに該当するのは前置詞onであるということがわかる。(なお、照応の観点からこの焦点節の構造を見てみると、分裂文自体、情報構造上、有標の度合いが極めて高い文であり、逆行照応の形をとっていると考えることができる。今西・浅野(1990)において、逆行照応の談話内の生起条件として、「逆行照応形は、先行する文脈に指示対象をもたなければならない」という仮説が存在すると述べられている。しかし、さまざまな資料を基に分析を行った結果、この仮説は誤りとは言えないが不十分であると言わざるをえない。先行文脈が存在しない談話の始まりに生起したり、予測が不可能である新情報を表す逆行照応形が存在するからである。Kuno(1975)、Reinhart(1986)では逆行照応の語用論的条件を挙げて論を展開している。文の話題や前提対断定の関係などが照応可能性に影響を及ぼすというのがその条件であり、話し手の視点などもこれに影響すると考えられている。)要するに、話し手の視点はon that levelの特に前置詞onにあり、文脈効果によって、情報重要度の度合いを増しているものであると言う

ことができる。そのため、on that levelのthatは先行文脈に指示対象をもっていると考える。これらを総合して、特に新情報であることを示す語彙はonであり、これが新情報であると断定できる要素であることがわかる。

- (65) Accidental fires caused by children have by now become so common that they seldom make the front pages of newspapers. When it is very young children who cause fires, they usually have no intention of destroying anything by their games, nor do they get pleasure from the fires they start.

この文章は高校生を対象にした英文解釈問題集に載せられていた問題の一つである。内容は、子どもによる失火は今までよく起こっており、新聞の第一面にめったに掲載されていなかったが、かなり幼い子どもたちによって火事が引き起こされる場合、子どもは何かを破壊しようという目的もないし、それから喜びを得ようともしていないものである。分裂文が含まれているのは以下の部分である。

- (66) When it is very young children who cause fires, they usually have no intention of destroying anything by their games, nor do they get pleasure from the fires they start.

(66)は、(65)の中で、分裂文が含まれている箇所を抜粋したものである。When節の中身が分裂文になっている。先行文脈において、childrenという表現があり、(66)ではvery young childrenという表現に変化している。要するに(66)の焦点節のvery young childrenの中でveryが形容詞youngを伴い、これが新情報になっていると言える。ここで、先行文脈と焦点節に的をしぼって分析を行ってみる。

先行文脈中で用いられているchildrenは、幼い子どもからかなり大人に近い子どもまで広範囲の年齢を示すが、(66)では、very young childrenという形式で強意の副詞のveryと形容詞youngを伴っている。このことにより、先行談話において聞き手が子どもに関してかなり年齢の幅がある子どもと推論した後、分裂文の焦点節のvery young childrenの形により、子どもの年齢を制限して次に続く談話の内容を推論していくことが考えられる。よって、幼くない子どもを排除しているというニュアンスを伝える効果を与えていることがわかる。このことによって、分裂文は擬似分裂文と同様に、排他性を兼ね備えた構文であることがわかる。この分裂文の排他性について、次の文を用いて具体的に考察してみることとする。

- (67) (In the final examination)

Kenji didn't cheat, Kayo didn't cheat, and Hiroaki didn't cheat. It is you that cheat at the examination.

(67)の例は、ある学校の最終試験で不正行為(カンニング)が発覚した時の場面であり、疑われている学生はKenji・Kayo・Hiroakiとyouであり、前の三人はカンニングを



行っていないことがわかり、youがカンニングをしたことが分裂文からわかる。よって、四人の中からyouを除いた三人をこの分裂文の焦点節は排除したことになると言える。

ここまで、先行文脈内で示された情報を分裂文の焦点節において新情報として再提示する再提示型新情報の分裂文を扱った。最後に分裂文の中の焦点節の中で全くもって新しい情報（Brand-New Information）が用いられた談話の例を二つ取り上げて考えてみる。ここで分析に用いる文章は、1998年に大学入試において実際に出題されたものと高校生を対象にした長文問題集の中に使われているものである。

- (68) The third theme in twentieth-century cultural history, more and more evident with each passing decade, was the importance of the United States. Not only did the U.S. make major original contributions to philosophy, science, art, and literature, but the important aspects of Western European culture were absorbed into the American intellectual world and achieved their ultimate form and highest significance in the American context. It was the magnetic quality of American society and the determining force of American wealth and power that changed intellectual movements that were heavily European in origin into their definitive historical form.

この文章は入試問題のほんの一部であるため、ここでこの文章が含まれている談話全体の大意を述べておくことにする。20世紀が終わりを迎えるにあたって、過去を振り返って、21世紀を展望することには意義がある。20世紀という時代は、人類の知性が最も進歩し、発展を遂げた世紀であったが、その反面、最も道徳的に退廃し、後退した時代であると定義づけることができる。それらの原因の解明には歴史ばかりでなく、他の学問の洞察力が求められる。これから私たちのもとへやってくる21世紀では楽観的な見方をして、人類は極端に走り、無秩序・暴力の時代を新たに迎えると予測する人もいるのである。20世紀の西洋の文化を考察する上での三つの観点である、モダニズム、社会・政治と思想・芸術との相関関係やアメリカの果たした役割を見てとることができる。特に、アメリカ合衆国について言えば、その人を惹きつけてやまないような資質と富と権力を通じて、ヨーロッパを起源とする知的世界（哲学・科学・芸術・文学）を吸収して、その肥沃な土壌のもとで知的活動を醸成させ、深化・発展させて、集大成させた貢献は大きいのである。以上が、この文章が含まれている談話全体の大意である。この談話全体の内容の理解が、後で行う分析で必要になってくる。

では、この例文中に含まれている分裂文を取り出して分析してみる。

- (69) It was the magnetic quality of American society and the determining force of American wealth and power that changed intellectual movements that were heavily European in origin into their definitive historical form.

この文はかなり長く、統語構造もやや複雑で理解しにくい。焦点節は the magnetic quality of American society and the determining force of American wealth and

power の部分である。ここで、この文にいたるまでの推論過程を考えてみることにする。

(70) (68) の文章の推論過程

推論過程①：20世紀が終わりを迎える。



推論過程②：20世紀を振り返り、21世紀を見つめることには意義がある。



推論過程③：20世紀は人間の知性が特に進歩して、発展を遂げたけれども、最も道徳的なものが失われていった時代ではなかったのか。



推論過程④：原因を究明するには歴史だけでなく、他の学問の洞察力が必要だ。



推論過程⑤：21世紀は物事を楽観的にみる、無秩序・暴力の時代を迎えると考えている人もいるのだ。



推論過程⑥：20世紀の西洋文化を考える上で、モダニズム、社会・政治と思想・芸術との相関関係や、アメリカの果たした役割を考えることが要求されるのであろう。



It was the magnetic quality of American society and the determining force of American wealth and power that changed intellectual movements that were heavily European in origin into their definitive historical form.

文意：(アメリカ合衆国がその人を惹きつけてやまないような資質と富と権力を通じて、ヨーロッパを起源とする知的世界(哲学・科学・芸術・文学)を吸収して、その肥沃な土壌のもとで知的活動を醸成させ、深化・発展させて、集大成させた貢献は大きいのである。)

まず、誰もがみんな、世間知として20世紀が終わりであるということを理解した上で、この談話を理解していくことになると考えられる。ここで、この文章を書いた筆者が20世紀を振り返り、これからやってくる21世紀を見つめることに意義があると主張していることをまず認知して、理解する。その後、20世紀がどんな時代であったか、筆者の考えを理解し、原因を探るにはさまざまな学問の洞察力が要求されるのだということを理解し、21世紀がどのような時代になるのかを考え、他の人がどのように考えているのかを理解する。20世紀の西洋文化を考える上で求められる三つの役割はどんなものであるかを理解して、最終的に、分裂文によって、アメリカ合衆国がその人を惹きつけてやまないような資質と富と権力を通じて、ヨーロッパを起源とする知的世界（哲学・科学・芸術・文学）を吸収して、その肥沃な土壌のもとで知的活動を醸成させ、深化・発展させて、集大成させた貢献は高いのであるということを認知することになる。

上に示した推論過程の図から、一連の談話が存在し、そのまとめとして分裂文が効果的に用いられ、文体的にもバランスのとれた談話が構成されていることがわかる。さらに、前節で設定した仮説と照らし合わせてみると、その言語使用の妥当性がより明確に立証される。仮説Ⅰにおいては、すぐ前の接近可能な文脈に対して、知覚処理がなされるならば分裂文の *that* 節は文脈効果を保証することが期待されていて、これは、分裂文の焦点節にもあてはまり、後に続く文脈において知覚処理を制限するものにもあてはまると言われており、この仮説はここでの推論過程を満足すると言える。仮説Ⅱにおいては、分裂文の焦点節は *that* 節とのギャップを認定するために知覚処理されるならば、文脈効果を保証することが期待されていると言われており、この仮説もまたここでの推論過程を満足していると言える。仮説Ⅲにおいては、分裂文は聞き手を意図された文脈効果の中に導くことによって、関連性に寄与していて、結果として必要とされる労力が減ると言われており、この仮説もまたここでの推論過程を満足していると言える。

ここで、この分裂文は全くもって新しい情報 (Brand-New Information) が焦点節に入った例の一つとして挙げたわけだが、この推論過程の図から関連性があると言えたので、全くもって新しい情報 (Brand-New Information) とは言えないのではないかという問題が起こってくる。ここでは、焦点節に用いられている *the magnetic quality* の *the* が前のものを指示する前方照応の限定詞であるのか、あるいは後に続く文脈で示されるものを指示する後方照応の限定詞であるのかを考察することが求められる。一般に、前方照応の限定詞 *the* が付いているものは旧情報であるとされ、後方照応の限定詞 *the* が付いているものは新情報を示すとされているが、この (69) の例は後者の例であり、ゆえにやはり全くもって新しい情報と考えることができる。(なお、前の例で (67) の分裂文は、排除する働きがあると述べたが、この場合の *you* は外界照応を示す代名詞であるといえる。) では、次の談話の例を考えてみることにする。この文は、高校生を対象にした英語の長文問題集から抜粋したものである。

- (71) In every aspect of our daily lives we need to communicate with one another. We do this mostly by speaking to other people and listening to what they have to say to us, and when we are close to them we can do this very easily. However, our voices will not travel very far even when we shout, and it is

thanks to the invention of the telephone that we are able to communicate with our fellow men when we are far apart. The telephone is a method of transmitting speech by electricity. It was invented by Alexander Graham Bell, a Scotsman who was born in Edinburgh in 1847. Bell, a teacher of elocution who later went to Canada, spent all his free time experimenting.

この談話の内容は私たちのコミュニケーションにおいて欠かすことのできない電話に関するものである。この談話の中に用いられている分裂文を取り出して分析してみる。

(72) “…it is thanks to the invention of the telephone that we are able to communicate with our fellow men when we are far apart.”

焦点要素が thanks to the invention of the telephone である。ここで、この分裂文は情報構造的には全くもって新しい情報が焦点節に入った分裂文であることがわかる。関連性理論に基づいてこの分裂文に至るまでの推論過程を示すことにする。

推論過程①：日常生活のあらゆる側面においてコミュニケーションが重要であるだろう。



推論過程②：コミュニケーションの中でも、話すこと・聞くことによってコミュニケーションを行っているのが中心をなしている。



推論過程③：声を出して叫んだとしても、そんなに遠くまで声は届かない。



推論過程④：人間の肉声は遠くまではとどかないのだ。



“…it is thanks to the invention of the telephone that we are able to communicate with our fellow men when we are far apart.”  
 文意：(私たちが遠くにいる人とコミュニケーションを図ることができるのは電話の発明のおかげである。)

再提示型新情報の含まれた分裂文に至る推論過程の図と違う点は、推論過程間のつながり（Coherence）が表面的には存在しないように見えるということである。しかし、「コミュニケーション」という観点からは十分に関連性があるといえる。推論過程①において、コミュニケーションの重要性について認知し・推測し、推論過程②において、話すこと・聞くことがコミュニケーションの中心であると認知・推測すると、聞き手は世間知として話したり、聞いたりすることには電話でのコミュニケーションが不可欠であると理解しているため、推論を可能として、後に続く文脈の内容を理解しやすくする。よって、関連性があると認められるが、情報的には全くもって新しい情報が提示されていることがわかる。

### 3・5 まとめ

この章では、Kato (1998) を先行研究論文として概観し、論文中で設定されている仮説を参考にして、英語における分裂文分析における仮説を設定し、関連性理論を用いて談話における分裂文の分析が可能であるということを立てることを目的としてここまで論を展開してきた。ただし、再提示型新情報が焦点節に現われた分裂文が多く、情報構造的に全くもって新しい情報が焦点節に現われている文例は、少なかった。強調表現を行う際、分裂文ではなく副詞を中心とした強調語句の使用や文要素を前置することで情報重要度をより高いものに行っている場合が多いことも付け加えておく。関連性理論に関しては、談話はすべての関連性に基づいて、相手に推意という行為を通じて効果的に認知・理解されていくということがここでも確認された。関連性理論を用いることで、情報構造の観点からの分析よりも、より明確に説明が行うことができ、理解しやすくなり、今後さまざまな分野における研究で用いられることが期待される。

分裂文は、擬似分裂文に比べて有標さが増す構文であり、同時に排他性を含む度合いを強く引き出すという性質を兼ね備えた構文であると言える。また、分裂文の焦点節に現われる新情報には意味論的・情報構造的観点から二種類の新情報（再提示型新情報、全く新しい情報）が存在し、特に、再提示型新情報には、前方照応指示をする代名詞が用いられており、その新情報の中にそれを新情報であると決定づける語彙が存在することがわかった。なお、全くもって新しい情報が焦点節に現われた分裂文においては、意味論的・情報構造的観点からは、新情報であることがわかるが、関連性理論を用いて分析を行ってみると、談話において話し手は、推論と言う行為を行いながら情報を認知・理解していくので、確かにそれらは全くもって新しい情報であるが、それらをそう呼ぶためには、定義をより明確なものにしていくことが今後必要になるだろう。

## 参考文献・引用文献

- Aitchison, J. (1995) *Linguistics: An Introduction*, London: Hodder and Stoughton Limited. [田中春海・田中幸子・若月剛訳 (1998) 『入門言語学』東京: 金星堂]
- Akmajian, A. (1970) "On Deriving Cleft Sentences from Pseudo-Cleft Sentences." *Linguistic Inquiry* 1. 2, 149-168.
- 天野政千代 (1976) 「分裂文の焦点位置における副詞」『英語学』第14号, 66-80.
- (1987) 「分裂文管見」『活水女子大学・短期大学活水論文集英米文学・英語学編』第30集, 141-170.
- (1993) 「分裂文についての一考察」『久留米大学文学部紀要国際文化学科編』第3号, 27-38.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances—An Introduction to Pragmatics—*: Oxford: Blackwell. [武内道子・山崎英一訳 (1994) 『ひとは発話をどう理解するのか—関連性理論入門』東京: ひつじ書房].
- Cole, P. & J. L. Morgan (eds.) (1975) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Collins, P.C. (1991) "Cleft and Pseudo-Cleft Constructions in English." London: Routledge.
- Declerck, R. (1981) "Pseudo-Modifiers." *Lingua* 54, 135-163.
- (1983) "Predicational Clefts." *Lingua* 61, 9-45.
- (1984) "The Pragmatics of It-Clefts and Wh-Clefts." *Lingua* 64, 251-289.
- (1992) "The Inferential *It is That*-Construction and its Congeners." *Lingua* 87, 203-230.
- (1994) "Review Article: The Taxonomy and Interpretation of Clefts and Pseudo-Clefts." *Lingua* 93, 183-220.
- Declerck, R. & Seki, S. (1990) "Premodified Reduced *It-Clefts*." *Lingua* 82, 15-51.
- Emonds, J.E. (1970) *Root and Structure-Preserving Transformations*, Indiana Univ. Linguistics Club.
- 福地 肇 (1985) 『談話の構造』東京: 大修館書店.
- Geluykens, R. (1988) "Five Types of Clefting in English Discourse." *Journal of Linguistics* 26, 823-841.
- Grice, H.P. (1975) "Logic and Conversation." In Cole, P. (eds.), 41-58.
- Grossman, R., L.J. San, and T. Vance. (eds.) (1975) *Papers from the Parasession on Functionalism*. Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
- Gundel (1977) "Where do Cleft Sentences Come From?" *Language* 53. 3, 543-559.
- (1985) "Shared Knowledge and Topicality." *Journal of Pragmatics* 9, 83-107.
- Haegeman, L. (1989) "*Be Going to* and *Will*: a Pragmatic Account." *Journal of Linguistics* 25, 291-317.

- 池上嘉彦 (1985) 『意味論・文体論』 東京：大修館書店。
- 今井邦彦 (編) (1989) 『一歩すすんだ英文法』 東京：大修館書店。
- 今西典子, 浅野一郎 (1990) 『照応と削除』 東京：大修館書店。
- Ivić, M. (1964) "Non-Omissible Determiner in Slavic Languages." In Lunt, H.G. (eds.), *Proceedings of the Ninth International Congress of Linguistics, The Hague*.
- 加藤雅啓 (1993) 「談話照応の原理—談話トピックと関連性理論」『言語学からの眺望』 福岡言語学研究会編 福岡：九州大学出版会 219-233.
- Kato, M. (1998) "A Relevance-Theoretic Approach to Wh-Clefts in Discourse" *JELTS* 15, 91-100.
- Kuno, S. (1975) *Three Perspectives in the Functional Approach to Syntax*. In Grossman *et al.* (eds.), 276-336.
- Lust, B. (ed.) (1986) *Studies in the Acquisition of Anaphora I*. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』 東京：大修館書店。
- 長原幸雄 (1990) 『関係節』 東京：大修館書店。
- 旺文社編集部 (1998) 「98年全国大学入試問題正解英語 (私立大編)」 東京：旺文社。
- 大江三郎 (1984) 『英文構造の分析—コミュニケーションの立場から』 東京：弓書房・鷹書房。
- Prince, E. (1978) "A Comparison of WH-Clefts and It-Clefts in Discourse." *Language* 54, 883-906.
- (1979) "On the Given/New Distinction." *Papers from Fifteenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. University of Chicago: Chicago Linguistic Society. 362-376.
- Recanati, F. (1989) "The Pragmatics of What is Said." *Mind and Language* 4, 295-329.
- Reinhart, T. (1986) *Center and Periphery in the Grammar of Anaphora*. In Lust (ed.), 123-150.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986) *RELEVANCE: Communication and Cognition*, Cambridge: Harvard University Press. [内田聖二他訳 (1993) 『関連性理論—伝達と認知—』 東京：研究社].
- 高橋順一 (1992) 「分裂文と前提情報」『旭川工業高等専門学校研究論文』 30, 101-115.
- 田中 実 (1980) 「疑似分裂文 When...is...構文」英語青年, 第126巻/第6号 295.
- The New York Times International (1998年8月6日)
- 宇井 洋 (編) (1996) 『書きこみ式20日間完成「総合英語 (高校中級用)」』 東京：日宋社
- 宇佐美一朗 (編) (1987) 『書きこみ式20日間完成「英語構文 (高校初級・中級用)」』 東京：日宋社。
- 安井 稔 (1978) 「新しい聞き手の文法」東京：大修館書店。
- (1996) 「コンサイス英文法辞典」 東京：三省堂。